令和６年度　南阿蘇中学校　学校だより

夢湧き、夢に夢中

第19号

令和７年３月24日　文責：大谷

いざ、十年目へ

「在校生のみなさん。みなさんと、こうして同じ時を過ごすのも、この卒業式が最後となってしまいました。ここで、一つ伝えたいことがあります。それは、『友達と話すことの大切さ』です。わたしは中学校に入学し、友達とたくさん話したことによって、物事を柔軟に考えることができるようになりました。たくさんの友達と関わり話すことによって、自分にはない『ものの見方』ができるようになりました。前は自分の性格が嫌になることもありましたが、友達がわたしを変えてくれました。友達のおかげで、自分のことが、もっと好きになりました。だから、みなさんも楽しいときも苦しいときも友達を大切にして、学校生活を送っていってください」

先日の卒業式の答辞の中で、板東 朗史さんが在校生である一、二年生に託した言葉である。この三年間での友達との関わりの一つ一つが、自分を大きく成長させたことを実感している板東さんの言葉には、重みがある。特に、「自分にはない『ものの見方』ができるようになった」という言葉には、わたし自身も改めて感銘を受けた。ひとはどうしても自分のものの見方や考え方に固執してしまったり、これまでに刷り込まれてきた固定観念にとらわれてしまったりすることがよくある。わたし自身が、まさにそうであり、その方が楽なのである。なぜなら、今ある自分の見方や考え方を変えるためには、何か「新しいこと」を始めなければいけないということであり、「変化」を起こすのは大変だからだ。しかし、卒業生たちは、この三年間の中で、友達と喜怒哀楽をともにしながら、常に自己変容に努めてきた。だから、代表として卒業生の総意を代弁したのだろうと思う。重みがあるはずである。

「最後に、三年生のみんな。これまでの三年間、みんなとともに過ごせて本当によかった。今まで学校に行けばすぐに会えたのに、明日からはみんなに会えないことが本当に寂しいです。この別れをすぐに割り切ることができないほど、わたしにとってみんなと過ごしたこの三年間はとても濃いものでした。行事だけではなく、日々の何気ないみんなとの会話が、いつもわたしの拠り所になっていました。辛い時を乗り越えられたのは、みんながいてくれたおかげです。

わたしたちの学年は仲間思いの学年です。これまでも、誰かが困っていたら、その人のことを決して見放したりしませんでした。これからそれぞれの進路で離れてしまうけれど、また会ったら同じように笑い合える関係でいたいです。これまでの三年間、一緒に過ごしてくれて本当にありがとう。」

答辞は、同学年の仲間たちへの感謝の言葉で締めくくられた。同じ場所にいた者のひとりとして、心が温かくなったとともに、こんな濃密な時間を共有した卒業生たちが、心底羨ましくなった。そして、こう思った。

「来年、二年生がどんな言葉で締めくくってくれるか。再来年、一年生がどんな言葉を仲間に語ってくれるのか。」

楽しみでならない。と同時に、「一年後、または二年後のこうありたいという自分の姿を、今から強く願っていかなければ、到底そこにはたどり着かない」ということを。

令和六年度が終わる。さて、この一年間、皆さんにはどんな夢が湧き、どんな明日叶えたい夢を叶えてきただろうか。そして、夢に夢中になれただろうか。令和七年度は、すぐやってくる。一年後、二年後の自分と自分の仲間たちとの姿を思い描き、それを夢として叶えるべく仲間とともに夢中になれる日々を過ごす。そんな令和七年度であってほしい。そして、開校十年目を迎える年でもある。卒業生はじめ多くの人たちの思いが託されてきた節目の年でもある。夢中になるしかなさそうだ。

■令和6年度の修了にあたり、保護者の皆様には本校の教育活動に御理解と御協力をいただきましたことに、深く感謝申し上げます。令和7年度も生徒らの夢の実現に向けて職員一同邁進してまいりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。ほんとうにありがとうございました。（ご愛読いただいたことにも重ねて感謝します）